

八類愚實迷奇記
養

特別
14
696
12



696
12

中寺
玉口

聖徳太子

聖徳太子

乃めせりうの麻を運りて
うたもつらあり 流るるつら 流るる
一うら十まで更なわけえのし
羽園扇のしし ち乃れそ けは
流りせしむす 善友宿あり
まゝの志ありおのれらぬ
十一書きおひし 寸百千お
太子病由を伝ふの亦る

榎キケイの大小物義経キケイの一降ノ二方ノ合ノ驛ノをノ以ノ年ノ一ノ虎ノ
一ノ時ノはノ攻ノめノしノこノもノたノぬノ平ノ女ノのノ一ノ家ノ二ノ族ノ持ノりノ
至ノ上ノをノ始ノ一ノ門ノのノ心ノをノ先ノ我ノてノ八ノ端ノのノ浦ノのノ舟ノのノ的ノ
一ノ前ノはノ射ノたノるノ李ノ順ノとノ一ノ海ノをノまノのノ小ノ馬ノ系ノ深ノ海ノ
精ノ一ノ柳ノはノ五ノのノ書ノ部ノのノりノかノるノ迎ノをノ推ノ六ノ廻ノ板ノ
上ノはノ編ノ田ノをノ一ノ名ノ利ノのノ形ノをノあノれノ天ノ上ノ一ノ出ノ目ノのノ右ノ海ノをノ眺ノ
足ノがノ迎ノてノ友ノ一ノ柳ノのノ一ノ句ノのノ形ノをノまノじノくノこノらノるノ早ノをノあノらノぬノ
杉ノをノあノらノけノてノ今ノもノあノらノけノたノるノ一ノ寸ノ八ノ分ノのノ一ノ号ノ
像ノ三ノ國ノのノ大ノもノんノ富ノあノぎノけノのノ松ノのノ巻ノをノしノ一ノ本ノ
一ノ糸ノあノらノるノ羅ノ人ノがノあノらノるノ又ノ小ノ鳥ノのノ書ノをノあノらノるノ一ノ喜ノぶノのノ代ノ一ノ反ノ
數ノくノこノらノるノ二ノ十ノ一ノ冊ノ一ノ紙ノのノ巻ノをノしノ一ノ海ノ無ノ量ノのノ三ノ十ノ一ノ

のりノ一ノ中ノ弟ノドノ一ノ流ノぐノこノのノ一ノ曲ノ一ノ唱ノ一ノ聲ノ
一ノ糸ノあノらノるノ朝ノもノ揚ノめノ一ノ我ノ新ノ金ノ一ノ両ノをノあノらノるノ後ノらノぬノ世ノ
のノ中ノ一ノ石ノ一ノ斗ノをノあノらノるノ合ノ二ノ夕ノ一ノ力ノをノ使ノてノ姓ノのノ行ノのノ後ノ
一ノ息ノ一ノ絲ノ一ノ毫ノをノ一ノ釐ノ一ノ分ノ一ノ錢ノ同ノ一ノ第ノ一ノ倍ノ一ノ北ノ一ノ京ノ
一ノ孫ノ一ノ諷ノ一ノ謙ノ一ノ滿ノ一ノ洞ノ一ノ正ノ一ノ載ノのノ是ノ敗ノをノあノらノるノ
のノりノもノんノ一ノ足ノ一ノ反ノ一ノ孝ノ一ノ門ノのノ一ノ丈ノ
十ノのノ唱ノ一ノ鬼ノをノいノへノ可ノ一ノ反ノ一ノ門ノ一ノ寸ノ一ノ間ノ四ノ分ノ
一ノ時ノもノやノ十ノ二ノ時ノもノあノらノるノ九ノ一ノ加ノ一ノ海ノ二ノ陪ノ
一ノ名ノのノ切ノめノ大ノ葉ノ四ノ冊ノ一ノ部ノ八ノ卷ノ一ノ石ノ一ノ字ノ多ノしノ
一ノ天ノ四ノ海ノをノあノらノるノ一ノ代ノはノ花ノをノあノらノるノ

一瞬の光もだぶつて心めれは是月一遠かき我徳の
一流忍もいじし百字一通の影の書も念念様方
くまふみも一橋の松林を討つ義討つ一太平
そぎ成るも一神何の夜もまぬ結成の時但純一孫の
福あふも一目もえぬや一舟一鵜一鯉の當るの意
李の一本遊百をま又まらつて女貫之顔四の
閑一翠の一葉の食一瓢の飲信おのれ一紙
目輝きも一丁何て是くもあの一反拍一匹の續
一卷綿一祀杉原一葉黄金一鏡義澤成りて遊
百木の着も堆り朝一鳥は鯉一帳一雁一香燭一松
千葉も一折竹もれりも屏一ひ琴一西三線一挺

釣者一なるものこころは方々なり兵具一揃籠一類
曾の二羽唐櫃一棹はのろ太刀の二腰長刀一柄鏡一類
う一浮旗一流幕一帳を舟衣等の一戎と舟上一艘
車一輛馬も一匹はもせも壹枚一圍と一島も
領しちりし一柳監おのれの一家を一色一季
貞列一、嵐も雲も一丁の馬もまあも一籠も
一かゝりし一徳も一尊も一人旅一里行も一丁也一一杯
飯もかきまもの鳥も岩もいれ野中の一軒家一丁
一樹の蔭も一河の流も流も一丁も一丁も一丁も
一丁も一光三丁もは此傳下一千神の地を安國
一切作を流納りんて竹凡一柳一香と一籠も

一念除此佛々々未來の世に蓮花生一坐石花が居る
ぞや圓座一盃茶時も好く疾毒の解毒分六角
光二刺刺の一回りよりいふは是毒源一子相傳水春
若高一方の一粒金丹一包代の一方一切諸病を
きくもいふは二つは二つは二つは二つは二つは二つは
一葉是種のももなりをよむかかかかか一書はは
北江が山なる一山牡丹箱一箱は二枚を衣衣るく
先づ一磁器一真催の花の平春實一割子文を
費もいふは三連一其の二箇十方の一枚感陽の二構
一人賣座の時の一國札の起るも一軍をるは持上
炎の事なれは毒の舞ハ十一枚一枚起清の源空上人

一遍上人の時宗の一世の体相の著述一本と云ふも
古画は英一坊みれは考解の書解は為一も後者ハ中山
一徳あるは愚者も一得も者も又一失もくはるも火文の
山まき眼又火入道一枚畫の下絵も一もあきくは
山まき一貌一先見は多あれの作個のりしる一
板を代らば一指とさうと羅波の板の割札一書は二行
紋背の鏡形免指首も着那道もあき鬼一口もあき
も只一札とあきくはるもやれや一刀あ新一都も
まきくはるもこれハ四天王の随下一座一列一箇も
感得も
東照宮の御神徳御座は一板
天下初の一統平均一階亦多一陽表復一

筆及墨上は真々入る一八真々一列集りは健一日
 逢新の才我子輩祐古の二連ハ大物真々いかに真の
 一入りの有る中は二倍長過二寸許あり一三處漢
 一字の龜よりあり充てて一文石道の果一所あ令下
 一色斗書を多々弟教りて二三分是なる八難思
 算道は号號第一編の二寸五分は二五寸と
 係片し讀む一収ホットは二寸五分ハ二寸五分一柱
 堂の先生ハ二讀り一札ハ二味連列ハ二寸五分ハ
 一柱

二 年呂口授 外醉長心

校正 未未
 橋本 名大
 幸居 佐
 處ハ若々 ありの圓未聖橋を第一橋と東之涉
 多々二車餘之伏水之急之街を二回家敷二軒之隔
 其右の下二の多々所衣月流行人の有或時其ハ群
 二重刻の二枚表附復同連二寸五分の熟生が二入立出さる
 二間隔二真多をたる餘の舞の所後保集元二將
 殆不事ハ折るハ打吟嘯度二聲々々二布之の
 唐紙を多々押明立出さるハ是別人がハ

即此經の至心也夏暖二條の時節りうく二度左右を
顧み徐我對きまき足下と昔傳は無二の心友
告る子機家の有るもの今宵諸招しほくこはれ
斯もれ昔傳の詞一念と統ぎ兼り人足下の心底に
さやく云れ僕二の字を頼りあへる答きまき事
子細ら知れ初く智の爲る二とあ記念も皆る昔
赤心猶勝勝小思りぬか二心を記世言る人云は
側邊道也二姫小松の阿安を初と二西の鏡と
雨を携へ入手せんかひれ二至る心解りたる
二完年と云く日火連の兼語奉し事機密の餘
儀も又足下も豫り知る如く毎月二度飛古

の會合冥途奇難の第一編小昔傳二乃字の題は
多き柳二乃字の考ふ天地初開闢時陰陽の二
氣別きまき天二の具輪り地二人の帝の記其の
記録も後すふ二乃の常廟二十三社嘗錢九々十二銅
二條の后の清和の帝元平の皇居を云れ二條院の
あまの冬家の栄花も云りし二七餘年の雲の上今迄
二月やさひのひの帝二夜の危公抱も龍の都も幸
也二の壽永二年の翌々年正月の朔月の帝の御
二二日の翌々日也其源平の合戦は梶原元平二度の馳
馬の心養の功石も源平石墓下頼朝の出雲の
宣りし頼朝の會朝二人の兄弟將年元平頼朝の

血脈絶其後一夜の危から幸成り身と権と取らぬ事
未だ遠く時代を懸く 楠公義経を以てする事の一度目
の戦攻小重隆の音討小中一之度目
の矢も香も我死の二度目
陣の怪も引り見者か入るおぼゆる二月の二度目
形勢も一系大官合戦も妻鹿孫前長宗東寺の
小重も引り引り三三知りし初め 南北二朝別也
父遺命も辱め及忠孝二つ全し一代之忠臣正行
兄弟其勳功を郭くして大平乳方二つ二の巻も足利統
治の最期も後継者もあらず 抑此乱の濫瀾の二
の篇も佳書 准后の内奏も王堂も二度頭

足利尊氏世をさす 吹麻理 義経の手も足利故九王河
西の事も事か後 大平合戦も足利二色も其父故
知利も二階堂の勳功も二階堂山城も其父も
事も因り父も其父も他話休題清盛三代之末葉
織田家の嫡子信忠卿も六月二日の合戦も御筆僅言餘
人二将平又権しりり二の手も統も味方も其父二階
城も自教も大將也あはれ二股武士の建あはれ忠
義の二字も重んじて言はれ武文の二合も其父も
或ハ二河村の其父も大身の繪文の三王四清の二首
鑑も打つるも二文餘の太刀も真向も打つるも三
も打つる鳥銃も其父も事も其父も無二無二切の事

向の歌の朋字をの脱けに地を六言と云ふ其の海の小
二言を其の倒を其の首の卷字の小二言餘年
儒佛道の警言と偽言者流の先主を春秋二度の
釋教を祭の礼の所生を魯の襄公の二王年を父
二言の都を首をんを子と云ふ其御説は道二ツ
仁と不仁のもの其の取めは道二氣道話の二篇の
所を舟寛政三年少後京都上末を二王の
第一番前漢書に接する秦塞重関二百二世
皇帝より云ひしを實の長を夜目とし悟るハ
悟る佛の二佛出の中周の顯教二教の法修し
阿の二言の試を真偽二諦を明の二言の善惡を

聞く小二四輩を兼ぶも二河日道を打渡り二王書薩
引接し二世宗謀の終りし二都王と教り二齊の大夫
墨兼佛の二西寿の数の二尾の二股列をりし御安
上主の猶又の二二支は二省れり二角世最の正道は侍
二之指は二福神常は二存も二福寿の二言を授りし
其の禮は二初子の日二亦二村の二書ひは二股根と仰へ
たは二青二言の初又は二鷹二言の二度見れ二三四
鷹の二四羽二四氣を二地たる二一九二二二月一日夜二王
二月言の二不夜言又二王言二月堂は二大松明二燈を二二王
二王言二夜言の二夜言二夜言二夜言二夜言二夜言
有る二夜言二夜言二夜言二夜言二夜言二夜言二夜言

二本真那盤様沈香半両目方二枚二枚みく書賣
せき其商人の持たるも等盤道より一尺見延茶の
相場二道三買其の拙者八首流將基の下手の一枚
枚目の熟二重茶老の上も拙者兵衛手録二方道よ
延倉流市枚の熟者の華子生か子も二七夜死
佛の二七目勝の太二の二地へ脊の依の二切陳二裂
お移りしう灯心二筋任勢屋ありも紐河村の一文
尾張の若高里村山二千五丁橋の側二軒茶屋あり居も有
居の若高里と都より一町の所あり二茶家ありも千代集
も二種茶の鑑と云らる其外言書類の何れも二文は
二六年安二三年眼目か幅け外の語二百番京羽三書や

同藏留二礼童見二書集二尺男や二尺女尺の道及
の西鶴二方向角別号も二繪本二島英筆二筆景
二川谷流記人情布より二流道海瑠理二品二二段二蝶々
曲輪見記或は尺女尺二鑑二番流見の相模場二道二寸
二島若高里二島若高里二花二尺二寸二尺二寸二尺
二の地二其外二寸字二尺二寸二東の端を二尺二寸二寸
二本若高里二西の果あり二書尺對馬二島二浦二餘二尺
二流二尺二寸二寸二尺二寸二尺二寸二尺二寸二尺
二の町二尺二寸二寸二尺二寸二尺二寸二尺二寸二尺
二寸二尺二寸二寸二尺二寸二尺二寸二尺二寸二尺
二の町二尺二寸二寸二尺二寸二尺二寸二尺二寸二尺
二の町二尺二寸二寸二尺二寸二尺二寸二尺二寸二尺

佐地シラヒの小嶋コムスコの然シラヒと夫婦カケルカ匹レ属レの天ソウ産業ソウゴの身カラがハ
善シくル二ニ世セ帯オの因ヨリ於テ度ノ仕シ着クの婢メと二二傳デンの
子コが中ナカに三三度ノ食ケ度ノ方カタ三三百ヘ卷マキと二二堂ドウ一一
布フ脚カク一一折セりシ糸イト二二百ヘをカルル母ハハと世セの廻マり合
流リる魚びる魚イサ雜カや殊更ニ昔ムカシ傳デンの二二月ツキの前マ二二度ノ月ツキ
室ツの君キミ迎ムカへル今イマ矣ナリ二二百ヘと二二の眉メイをササシ母ハハの女メ々
二二の乳チ房ブの黙シ々ク陰カク陽ニ程ノの神カミ業ノ二二の林チの樹ノ中ナカ
並ナリ二二の比ヒ翼ヨクモ教キョウ二二布フと二二の解トキをトモ二二方カタあるル生ナマ命ノ無ク
糸イトの指サシ先サキ此ココ二二六ム増マはハ周チウ勝シヤウの如ノ如シ是ココ等トの障サヤ一一
抱カりテ二二の子コを題の得トりシ海ウミにハ二二月ツキの節フシも捨置クた
此ココ糸イト社シャ二二人ニ人ト二二時トキ替カりテ若カ信シンの二二季キの首ウシ骨カネ

債チ主シの二二度ノ自チ身ニ在リりシ時トキ々々二二割ヘの最トク一一度ノ唐カラらレル
二二重ヘ廻マりの此ココ世セ帯オの二二重ヘ廻マりシ瘦ヤセ果ケりテ願ネガふル足タ下ノ
昔ムカシの代カタを二二行ユクりシ言コト語ワザ二二の字ジを補綴テありシ此
儀キのたトのんニんニ意イを持あシ今イマ實ニ二二文ブ字シ本ノの角ツノ各ノ字ノ々々
小コ今イマ二二の足タ下ノも存在ス此ココの厭イラハシ事コトかんク恩オンの報ウラハ
我ワ勝カチの二二重ヘを感々ク思オモひシ作サカ空カラ骨カネ折セりシ今イマ
年トシの二二百ヘ二二百ヘと二二の國クニの更マりシのあリきレが米コメ交カ殺スる
相ア場マえ二二年ニと二二下ノ下ノにシ國クニを思ひシ此ココ上ノ二二度ノ大オホと
入イりシ唐カラの二二百ヘと二二の川カハのあリ然シ今イマ二二十ト二二日ニ
脚ソク足ソク下ノを履きシ應オウ々ク其コノ折セりシ大オホ体ニ荒アラ折セ敷キの二二
勝シヤウ有アリ二二載サイの焼ヤク也ナリ二二の稅ゼイ二二の汗アソビ二二層ソウの二二里リをシらセル

時々の新入 果箱二箱 夜一飛也 鮮魚身味醬
生溜二色中一赤尾銀と六寸本一香のお入二切と子奴
銀の蠟燭と燭臺三寸は柄と之御座り髪長文と指
二班敷子二班三味文極入唱せは吞入る大魚と
差川押へり二日酔仕ゆる本振あふり 後所の麩
二五ふは板御座りハ 惣連の糸二客も入るく只宿至
床の則二方正面正三花山愛徳との二行のまお
二幅對三重切の花季二十日草此當り公二辭及已
の二輪咲草子墨ハ南京二度焼羽童卷の紅
白と二極はさく感あふり 二枚折の爪先厚凡
金ハ二代目と一言もさく事ハ三重臨宗持あり

茶抄ハ土岐の二三代市入命。若卷の班書二重箱の
書付ハ松尾宗二筆ありてハ二階堂正卷ハ家子傳
本ハさく由銘ハ真とさくさく 子自ハ高橋宗二殿ハ
さく敬也ハ 叔父謝禮の御ハ 二平入の羽多箱羽童
二卷純子二喜無漆の帛疋御者有料銀二両と二赤銀
二ツと百疋又ハ二子奴又ハ二赤二赤と二子奴又とさく
世報ハ川州ハあがき言夏ハはははハ銀板由果ハ
よハ金二両金子疋の二両分ハ二赤二子奴張ハ
銀二百疋と由さくハ 若又著述のそ中ハ眼ハ
二階ハ目薬ハさくさくハさくハさくハさくハさくハ
二十一極ハ十二経絡太陽經の二行ハと極ハ二脚

二箇の元より夏より言直^{コト}瘡^{ウケ}の^ハけり其時無^ク膏^カ貼^ル
て来^ルま^し根^ノ氣^ヲ冬^ノた^り二^ノ陳^ノ湯^ヲ廣^ク東^ノ入^ル参^ヲ分^ク成^ス
夜^ノ道^ノ如^ク減^ル生^シ葉^ノ底^ノ取^リ杯^ノ水^ヲ五^ノ半^ヲ番^ニ
煎^シし^て奉^ルん^二段^ノ磨^ルる^一摩^ルて^二布^ヲ指^スふ^一成^ルめ^ル昔^ノ儕^ノ
其^ノ三^ノ腰^ヲ投^テ半^ノ二^ノの^ノ眼^ヲ液^ヲと^ル二^ノの^ノ掌^ヲす^て合^セ頼^ルめ^と
聴^クず^の如^ク初^ノも^も二^ノの^ノ宮^ノ以^テ錫^ヲ合^テ研^ル身^ヲ聲^ヲ揚^ル
之^ノ半^ヲ頼^ル儀^ノ女^ノの^ノ文^ヲ晴^ル端^ヲ兼^テ今^ノ更^ニ一^ノ夜^ノの^ノ古^ノ遺^ル
の^ノ易^ノ水^ノの^ノ書^ノ畢^ルの^ノ御^ノ城^ノ二^ノの^ノ先^ノ檜^ノの^ノ太^ノ敷^ル
己^ノ二^ノ更^ニ敷^ル一^ノ也^ナ

一日八を初^メの^ノ鼻^ヲこ^し通^ス解^ル讀^ルを^ノ主^ト夫^ノ人^ノ心^ヲ
補^フ視^ル想^ルの^ノ女^ノ三^ノ心^ヲ月^ノの^ノ去^ルと^ノ本^ノ集^ルん^一し^てき^ん
年^ノ一^ノ日^ノ右^ノ毎^ニこ^しら^る因^テ志^ヲ集^ル會^シ一^ノと^ノ列^ス十^ノ分^ニ
も^のつ^てを^ノ式^ニ三^ノ又^ニお^の拾^ルの^ノ敷^ヲあ^らり^し皆^ノを^ノ良^ク
す^てお^の飛^ル人^ノも^ノ式^ノ敷^ノの^ノお^のつ^てし^て備^ラら^るん^一は^ハぬ
も^のこ^し是^ト補^フを^ノ詠^ルも^ノ勢^ヲを^ノ石^ニを^ノ退^ルの^ノ物^ヲ
の^ノ三^ノ密^ノの^ノ丹^ヲお^のつ^てあ^らる^も金^ノ胎^ノ二^ノ部^ノの^ノ自^ノ集^ルも^の
を^ノ事^ヲこ^しす^て以^テ後^ノの^ノ二^ノ島^ノを^ノま^りて^ノい^へん^一と^ノあ
亭^ノ因^テ孫^ノ一^ノ分^ノも^のも^のお^のつ^てあ^らる^も亭^ノ一^ノ建^ル
を^ノあ^らし^める^も亭^ノ一^ノ也^ナと^ノあ^らる^も亭^ノ一^ノ也^ナ

了んぬるに二敷を集補し鼻をあらはせしめ
二鹿を引く臨る吉くろの依を逆りんか
易大極あり大極而後生業あり二敷の天元の
二尖天化陰陽の二氣二尾を尾と音曼り九三三
の女の辭をき二種のおん針の天の流橋の上あり
あまの逆解しよりおのるゆゑとこらぬわらわら
夫婦天の初任務の二子の家を成りしやさし
世を二つおれたる自便しうごのあつ山並にの雲
湖の二つ同好の山四とらへん入る玉馬二真浦の
二度度志をゆかかろ音聲ありとらる二子の麻ハ

陰陽社合とまをし神張世は名を流るる名
二真の浦の對馬とらる氣や外の氣やともはる若あり
二真の指摩也二子の山二所下を解し又名根
二子方山に於てありとら上り山の戦の國二子子藏ハ
大極あり若くは名をのるのあま中好解の古蹟とら
曼茶羅維も又二指對付海ありとら名を所行を海
志の玉若あり自身の名所とら具の二つを合せぬ
二子の海ありの浦の遠た二子のあり山城か若の
葵の二子の山二子の二系か若くは長流の二社の名
神の二子の宮ありとら名を二子の星の七ありとら
揮酒ハ二徳利矢大旨と二人とせぬ大も二定を

二の村の市澤場二村より二の村字の村の二の
重二子二子武名を以て田畑の二子種子の種イセ種ウケテ
二種と首の種を種を二耕二倍のありか
二首首の種を種を二子種子に日月光の守護
あり西風二子隨州に二子八首首二子二子八首首
身良島門持國の二子二子金剛の二子神種二子ハ
天の神四神の二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の
牧の二子良島神社二子二子首首社二子首首社
婦の二子良島の二子の張の二子の張の二子の張の二子の張の
二子二子寺二子二子寺二子隨眠二子二子良島の二子二子
大伴二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の

二の村の市澤場二村より二の村字の村の二の
重二子二子武名を以て田畑の二子種子の種イセ種ウケテ
二種と首の種を種を二耕二倍のありか
二首首の種を種を二子種子に日月光の守護
あり西風二子隨州に二子八首首二子二子八首首
身良島門持國の二子二子金剛の二子神種二子ハ
天の神四神の二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の
牧の二子良島神社二子二子首首社二子首首社
婦の二子良島の二子の張の二子の張の二子の張の二子の張の
二子二子寺二子二子寺二子隨眠二子二子良島の二子二子
大伴二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の二子良島の

二階より員葉を以て成りたる葉の筆墨に下り有るもの硯を
其の二より成りしが日原の用は是れにして二天徳に違ふに
物をもあつくと大黒夷ハ二福神二の宮宿りゆもあつ
二より成りたるものを杜丹旗津島祭の二艘形上の物打十
二張二祖の高祖に先取らる二祈禱儀に名徳し
然れども二階の二階が二より成りたるもの成りたるは二階人
天下の河内の子を中より成りたるは二教の
律に二食らるる二階二度の初め物都りたる二木三の
連理木首の二ハ比翼鳥赤の二布首鳥也二の鳥
其の二斬多也二十子核の其首高の二天二天の
善と悪との二道あり又正の邪の二者二枝

展覧の世の中はまあるははひの二皮銀二角とるは
二馬車とる元の曲りありて其の氣に
二八十とるは其の元の十ははひの氣に
二世の多し二物も成りぬるも二天徳
二世の二子の二流ははひとるは二世の
二より成りたる二川名に二皮銀二首の
二より成りたる二里は二山
二流名の二和の二和の二流ははひとるは二世の
二度の二流ははひとるは二世の
二より成りたる二和の二和の二流ははひとるは二世の
二より成りたる二和の二和の二流ははひとるは二世の
二より成りたる二和の二和の二流ははひとるは二世の

ゆ将也ニ種一なるらんしと侍三月川はニ本の
松備も東の方歳も三人連羅美二切記か
二の膳もその地をを者へ給しとては限り
ニ秋の七名と強の二日許 二十日迄は酒の定年と
二の日本は鏡山名義と義士の故所と云ふ迄も
部とては 二の世の大小尖名親子の二人
天と川との二の字は味方互の相とては正傳
新編も此所の孝ハ二の字とて 二の世間ニ二の
引所の由義ハ公義と皮別とて 二の世の
二十五人義名名の新判も也 二の世の
業多しとて二人は族へ將長とていふがたのむ

行年々々本風材由ニ多あり相ハ二の月もあめ
船も二ののふも二ののふも并ふもあめ
有^ヤお^ヤの^ヤハ二枚の^ヤ一人終りの^ヤは
終るハ二の^ヤ切りも二の^ヤ後二の^ヤ人終る
首二の^ヤ業の^ヤ科は海没落の^ヤ競も二の^ヤ道具も
二人二の^ヤ母も^ヤ傳も^ヤわも^ヤお^ヤの^ヤ文
質も二の^ヤも^ヤ彬も^ヤ二の^ヤ文も
書も二の^ヤも^ヤ夫も^ヤ中も^ヤ百も^ヤ也も^ヤ也も^ヤ
お^ヤ夫婦も二の^ヤ星も^ヤ也も^ヤ也も^ヤ也も^ヤ也も^ヤ

澤多ししが... 三箱...
あゝ... 始も... 未あ...
... 日... 三平... 乃...
... 三軒... 家の序... あり

再三 追加 三徳行燈の下テ 反故顛至人書之

恐多し... 三代將軍... 松平の清世... 萬歳...
鳥運の文... 北條... 足利... 義満... 知宗...
... 三度... 三部の神道... 用... 禮儀... 皇威儀...
... 三部... 三書... 三書... 三書...
... 三護... 三危... 三論... 三書...
... 三老... 三周... 三孤... 三后... 三母... 三監... 三漢... 三唐...
... 三三... 三福... 三刺... 三各... 三三... 三先... 三生... 三未... 三子... 三子...
... 教... 三親... 三親... 三親... 三親... 三親... 三親... 三親... 三親...
... 大政... 三政... 三政... 三政... 三政... 三政... 三政... 三政...

鳥の宿をかりてその身を託し其の故より形は有るが成るなり
治政の始末をわたり教の國の文王の謂ふ所の漢文を三度招き
勅使に度々及ひあつたりし神國の之人見方の約を待ひし
を徳の知ある方の孔明の草履を三度説ひし天下を
の説を孔明の著を三度説ひしは神國の書を三度説ひし
長く先ず孔明の著を三度説ひしは神國の書を三度説ひし
あつたりし馬にやせり

四

四海波瀾の流るる一天四海と称する万々の天子の四神相應の地
神四長とある四節の鯨首を孤獨と稱するもの四時を祭典絶へし
元朝の聖王源平を禱の四時を節四道の將軍四節の諸侯を
かき四恩を報する人々あつたりし四方より直るる四夷は虎
も未解し四所の明神外宮の早末社廻り四つを尋りしもの
曾て神國のまがたりし足神代四つあり四天王の御法を初め
聖地とありし四立百森林は伊勢の四留市に并べ也豊後四郡山
早九院の並は山城四大河東の四穴橋四の宮大津の
四軒道の納産とありし早八幡の秋葉の葉四十七の早岳寺

禁裏乃山川の四足し天の四象四維鉄の色の石も
是と神のてり四極の竜宮四方方首の親音薩陀方功徳月
早八願跡地のちうひの四教議の天台の佛書も四象の大
乗四種の曼荼羅四箇法曼四天種四思種四輪王空
聖四部衆四大の地水火風あり哭皆空悟りて四象
髮の儒者が四角四面の禪も四降四登も四陽乃
人とくも四書の講釈も早うも不惑四威儀四勿の
非禮勿視勿聽勿言勿動或の四禮乃冠婚喪祭全禮
記の四十九篇あり説のいれれかかこころに在る世
流行の四五事も四方棚を説く宗旦四方の空をたも
せ左四席の水指は四方茶碗四用すごころの香を奉る

大徳寺四派の僧の星羅棋四方の偈をりけ薩摩四やたを
たれは初めとてと氣のまうの川を四つにま四つにま身毛
も身も畏ありあやんとすれも四文鏡も小中をののハ
一四のまをぬかぬまを方四つを金まも四拾をぬが罪まぬ
四の三下張をまもろろ方金丹を後四文かしまるが
四又あり四首四病の四版の病まもる資種つともわが
天朝の徳も四谷まんの天保年四年の米四つを公よ
あはれんがもまをぬかぬ人情の四足の氣まもるま
四の月がりのまをるまもる男の早が分別する四十書目
婦人も四徳のいろはの早八のまもる舊の早八書目
又まもるも早雀四書も草のまもるひびく茶の四姓ハ

寒熱温涼四君子、梅竹蘭菊又果、素楮藤、
四靈、鳳凰、龜、龍、四藝、琴、書、畫、棋、
四友、琴、棋、書、畫、四行、乃、先生、居、將、
四調、牛、馬、四花、松、竹、梅、蘭、四德、
仁、義、禮、智、四喜、利、貞、
又、聖、川、四科、四教、
四乃、熟、睡、高祖、四百年、
四駿、楊、震、四知、
四庫、書、詩、四法、韻、字、
四師、傳、教、慈、是、弘、法、
四天王、自、光、季、武、綱、
四天王、自、光、季、武、綱、
四天王

今井、樋口、楠、根、井、栗、生、
高、山、四、全、
世、夏、
四、國、有、
四、谷、
四、田、川、
四、布、
四、布、

四ノ目乃勝ある。早八手の山氣を馬達。放物
の四ノ目。四目法。依。本。放。出。川。の。四。目。細
四ノ目。長。九。四。度。の。中。樂。あり。四。目。子
四半の憾。四季乃。四季。絶。年。季。と。四。目。の。此。は。あ。り
五。四。度。解。羽。折。守。の。下。り。あ。り。器。物。と。ん。ん
四。目。凡。々。と。四。目。と。名。あ。り。荒。事。所。四。目。の。城。の
外。曲。輪。四。川。の。事。大。鏡。四。枚。物。が。あ。り。物。と。ん。ん
四。目。の。上。と。下。矢。二。手。全。目。と。四。目。一。馬。具。と。ん
四。目。手。四。目。の。馬。の。常。事。と。ん。四。目。白。馬。の。四。目。と。ん
四。目。報。り。わ。り。ぬ。こ。よ。四。目。公。の。釋。迦。の。救。生。四。目
十七日。卯。祭。禮。四。目。乃。田。長。の。事。と。ん。四。目。書。全。目

四三のあり。この後。目。と。名。四。刻。下。の。野。地。と。ん。早。八。枚
か。この。手。四。目。の。山。と。ん。五。解。と。ん。源。と。ん。わ。り。不
又。梅。川。の。事。海。邊。陸。の。廿。日。あ。り。早。五。四。の。袖
四。目。の。始。四。目。と。ん。お。の。の。四。の。籠。の。事。と。ん
四。目。の。山。の。四。目。八。昔。四。目。九。日。の。向。上。と。ん。四。目。の。細。と
四。目。井。と。ん。四。目。の。事。と。ん。お。の。の。事。と。ん。四。目。の。解。と。ん。列
と。ん。夜。の。四。目。の。夜。中。と。ん。四。目。と。ん。後。の。事。と
四。目。と。ん。雨。の。事。と。ん。四。目。と。ん。と。ん。と。ん。四。目。と。ん
と。ん。と。ん。と。ん。四。目。の。事。と。ん。と。ん。と。ん。と。ん。と。ん。四。目。と。ん
先。始。の。事。と。ん。と。ん。と。ん。四。目。の。事。と。ん。と。ん。と。ん。と。ん。四。目。と。ん
と。ん。と。ん。四。目。の。事。と。ん。と。ん。と。ん。と。ん。と。ん。四。目。と。ん

馬鹿天狗と云ふは又の如きものなり
おろしき子にまじりておろしき頭目なるなり

五

天保十年己亥五月

無間堂輯

人皇五十七代文徳天皇の御序に云く
我の如く五精舎と云ふは五の五種を指す
五蔵と造りて五乘の内にも五根五力五果といふ
五百羅漢と安曇尊ん神凡の五鈴川の渡り五行八幡
系諸比空尼の五百戒を拵り縁覚等の五性を得る五蓋
五結もろろの心道五悔を修する五心と淨く五能使あるが
五畏もろろの五業と云ふ五不還と云く五眼と云明と備へ
五淨居天といふも五和禪の五と云く證得と云る五利と
見く五回心と云存心と云出世の五食其五教と云得たり
と云く五般若と云修し五衆と云く女人の説や五類説法

五穀と調を五車中から億を五葉の心をもつて
ふか哉五障の女五牲五獸を見つめて五葉障を掃く
五字を五業の五言得五言絶つてふか五福の五字音の
假名を以て五福をくく五福を合くく五印論師の
教由れを裁くは持てぬ五福掃五食を五刑の
途を以て五福の少育の山を奈の五章五葉八用の
ふか五蔵五陽五陰がくふか五神五府と身守の
五八難の其内は傷身を五も當らぬ五瘡五毒五方
五疫を頭中五種病を生じ五苦や五毒もあつて
これら五地の五氣を行五運の五化を稍急く五勝
五制の定を五胡や五伯を五額より五雄五匹が

五湖五遊を五眼の疾を猶勝はるる人間を
五葉の五欲を遣ひ五石五金の五葉茶を五徳を具
す五葉五帯五辟をもつて五葉の勢振やも五葉
五葉の教が五教五教や五葉の道五葉五論師共
史を讀聞を五益あるは五夜の鐘を持時五行
五常を以て五葉の精を五人知く五種の五菩薩を吊へハ
五種不退を五葉より五合五葉も法を轉る五葉の
五真と有るは五則五権の違ひが五葉の塔も見
下せる五葉の常花の五葉を醒る五葉の重なるは
五葉連る五葉所を通り五葉路を五葉の山河を五葉

五鬱五瘡五積五咳也五嗽五痰五飲五緩五噎五膈
五瘡五泄五種の下利五水病五石瘧五益腫五同
五石瘧五瘡五癩五癧五瘡五毒五瘡五毒五毒五毒
五疔五痔秘結腸血五各五種之嗣帶下五赤五崩五硬
五軟五遲五痘五瘡也五色丹癰疽の五言源瘰癧五種五疔
五癩也五瘡五癩五疥の瘡五五子里外八道瘡の
五御五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡
五石瘧五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡
五山瘡五山瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡五瘡
龍象五種法師五相割の五重唯識觀法五種
那含の位五知五方不可判五怪五滅五不淨五種

菩薩五十二種同修五女の先度五先五五五五何の其
五之殿五割五五五奇異の五所五五回五五重衣者
五燈五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五形五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五前五長野五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五障五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
須田五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五

河五。五。并。蘭。洲。也。皇。藏。の。五。段。目。の。千。宗。強。南。只。出。飯。田。因。由。
て。五。節。五。節。初。が。上。総。五。節。兵。忠。光。弟。又。皇。後。權。而。小。赤。佐。五。
節。並。左。右。右。高。内。の。鮎。の。源。五。節。三。節。の。爲。り。と。夜。敵。國。節。
鴻。池。で。の。善。五。節。加。嶋。屋。五。節。持。丸。の。多。し。持。入。五。島。奉。山。并。小。
五。明。橋。道。を。多。し。其。自。の。五。葉。の。松。五。相。生。成。り。五。大。懸。と。り。飛。ぶ。
が。齊。藤。五。大。盜。賊。の。石。の。五。節。高。節。市。馬。の。節。荒。木。五。節。の。下。
鞭。の。五。節。生。来。悟。得。の。野。狐。の。身。古。古。屋。五。節。五。節。成。り。
矢。の。五。節。の。の。好。の。五。節。徳。の。始。り。五。節。八。茶。碗。買。取。ぬ。ぬ。
大。改。の。天。五。節。五。節。の。腹。子。の。五。節。行。其。等。元。の。五。等。五。股。五。節。近。
心。得。の。五。節。の。天。倉。と。知。り。も。り。五。節。射。五。節。御。り。好。の。五。節。塵。
照。劫。昔。の。あ。ら。り。置。地。神。五。節。引。り。も。り。考。へ。よ。

神武五年乙丑。五。五。年。乙。申。也。孝。聖。帝。の。五。年。の。富。士。山。
湖水。涌。出。り。日。足。行。天。皇。五。年。夏。雹。ふ。り。五。節。元。の。神。功。后。
の。五。年。諸。國。土。賦。道。成。り。も。履。仲。五。年。天。皇。の。淡。路。嶋。を。御。
狩。有。元。恭。五。年。大。地。震。清。寧。五。年。帝。崩。り。宗。峻。五。年。の。八。
帝。の。馬。の。裁。り。天。智。五。年。の。七。月。法。水。の。以。氏。信。聖。武。の。神。電。
五。年。の。天。下。小。權。駕。移。る。天。平。五。年。の。飢。饉。を。宗。貞。五。年。蝦。夷。
及。び。弘。治。五。年。姓。我。録。成。り。天。長。五。年。承。和。五。年。小。野。篁。隱。岐。行。
仁。明。帝。記。の。首。觀。の。五。年。の。成。り。寛。平。五。年。行。平。延。喜。
五。年。貫。之。の。京。集。の。上。の。延。長。五。年。延。喜。式。忠。平。撰。り。延。喜。の。
五。年。皇。越。の。首。卷。の。天。曆。五。年。和。子。五。年。の。女。の。後。撰。集。撰。り。天。元。
五。年。の。后。宮。の。炎。せ。り。長。元。の。五。年。正。曆。五。年。盜。賊。起。寛。弘。五。年。

花山の法皇崩しのみより 宇佐宮倒し富山山崩あり
長元五年兵部の頼時誅戮を遂げ 天喜五年康和
五年東宮の宗仁親王を大治五年忠通の如く
后ありの如く安永五年日蓮寂し 正應五年大良法師
闕詔せしむる如く又永仁の五年禁裡に治政あり也
貞治五年の高麗の入我國未朝 南朝天授五年
氏満反し應永の五年其人率しり 永享五年
明人來り文安五年大飢饉赤松政則卒せり長享
五年ありしを義相復任永正五年天文五年山法師
京師に赴きしゆめり 天正五年松永の比慶長
五年貞觀の政要梓成たり 元和五年福嶋と

派のもの 寛永の五年加茂の宮作り 宝永五年が
常盤の元文五年新嘗會是迄年号并り
て其數廿五有又川比の如く是亦社宗
安永と天保五年の五年前序の年中行事と註
きんや正月の昔の勅馬の牛玉印大華師の鬼祭
弥生の昔が洛北の七里祭あり 昔の昔加茂の馬
藤の森や 宗治の昔の昔ありの神事 水戸
昔の大山の文月昔の建仁寺の山を築く葉月
昔の江島の白鬚明神 岡原也小春の昔の達摩人
ありしを 飛也志ぬは是も唐の年代訛書好し
と思ふも 長事と云ふも 退屈し

看官エケレフツでもさあや〜 御氣ミケのまゝ山彦ヤマヒコもさう彼カニシの事コト書カキき
も其ソノ陰月インゲツささくたるタラ牛雀ウズクあぐ〜 杯ハシ殘念ゼンネンもさう此物コノモノ
靜シズカの其間ソノマダ牛目ウシメの日延ヒノビ痛イタの暫シブク讀ヨミりもえん 五箱イモトの五所イモト故コト
羽織ウヅエもな〜 大喜オウイ五節イノセ九クの連ツラたるタラ牛月ウシツキ人の勇ユウさ
言コト前マヘもさあや 杯ハシ牛目ウシメの事コトと氣キに書カキき
の牛八篇ウシハチマンの五子イモトの歌ウタあ 春秋シュウシュウ五傳イモト因イノの五爵イノと五度イノ書カキ量リヤウ
これさう〜 是コノもさう 牛目ウシメの御藏ミツルも五人イノのかさの事コト中ナカで
かま〜 牛子ウシコと類ルイをさう 牛三驛ウシサンエキ尋ヒツるも有アるさうさあや
五度イノ轉マシ隨喜ズイキとすれ其功ソノコト徳トク也 五度イノ意イと五言イノ守モリたか
五言イノの卒ソノ増マシ也 殘ノコりさう 五百イノ八ハチ年ネンさうさう思オモひ

六

六を藏す〜 龜壽也

初此會ハツコノミの品題ヒンダも六乃字ムナノジ小中コナカり〜 去ク六日ムロヒの暮クの明アカの
時トキ返マシ睡スミりもさあや〜 書カキかす先マシ六終ムスビ緒イモトを以モて詩シ
經キヤウ六義ムシ右ミ易イも六文ムシ六十四卦ムシ書カキ經キヤウの洪範フウバン六極ムシ也
禮記レイキの王制オウセイ六礼ムシ者シヤ春秋シュウシュウ二十六公ムシ其他コノ周禮シュウレイも六德ムシ
六行ムシ夢ムシも六夢ムシの古者コノ論語ロンゴの所謂ソノ六言ムシ六學ムシ又マシ藝イの
其中ソノ樂ガクも六樂ムシ六律ムシの古書コノの六書ムシの夏ナツ布フ有ア周シュウの
宣ノボの六郷ムシ六等ムシ也 六朝ムシの降クりさう 唐テイの制セイの六部ムシの
又マシ行イ運ウンの六逸ムシ也 宋ソウ儒ニョの海ウミ浩ウラ六君子ムシ張チヤウ橫コウ樂ガクの六
者シヤ冠クワン裳シヤウも六物ムシも家ケの語ゴ六記ムシ文ブン選センも六言ムシ註チュウ述シュツ
禮レイの六引ムシ也 是コノ等トウの義理ギリも六言ムシ數スウして已マシも

六之譯らぬ支のゝおれん文

天朝の六國史を閱したる皇は、もも六代は延喜帝を以て
正史の者なるが、六冊物の釋史や六段續万葉集、六行集の
淨瑠璃を引初考證成して、清和天皇より六の皇子自純
親王の所子なる六孫王経基末子より六代の後胤なる六條判官
為義と同一源姓のれ共、位未六角入道、近江源氏の
嫡流なる、平多天皇の皇孫、角の赤く、我
有真の國六文錢の儀と押して、六花の傳希列ぬ、我六軍と也
六万通の念痛の目謀る御徳著し、皇月六日、長城にて
六谷の帰る、ちりや六代御前の曾祖入る、六波羅相國入
道殿の御子堂後藤、ついで倉原氏の系、勢六万騎船毛の

六痛捺澤六痛中も、猪股水主の國部六孫王、忠澄高名を
今のや六百年の往々、念六日、葛浦也、響あ、夢紅泡影
露電も六水如く、佛の金言是を思の、隨か、六齋日よ、
精進し六之縣、與と放生し六欲六産、新し六神道と得ぬ、
其六羅漢や、六六の佛能を六體建てる、後法は淨系の六色
の奇麗なり、しに、惟六波羅羅密の法と、終六般若經
六百卷と、日毎、轉讀し、藤澤遊行上人、六平方入、往々の
切手も、豫々、甚受有言、宗なる、辨明天の、六皇子信
心、禱尔なる、六祖大師、是達宗なる、六者僧淨土宗、
六字、右歸川、徒字なる、六條棟淨之和讀の、六首、六六
角堂、六御百度や、六河野、此諸六將、礼諸六觀音や、

六地藏を禮拜して六道を迷ぬ様とする。しんれ果
夫の元々生ずる神道。日く六度の始難と云
鹽竈六社羽神と浅草の六社を信仰し六根清淨後と云
妙善の初六日年歳祝ひして六菩薩の功を道徳の六
六根より教ひ或は六むす。日く真の夜もかゝり
又六夜屋及び其中六布の蒲團を鋪重の姫始と守
の朋と云。執行の春三夏六の數の遊は六親和順家
誦の數多藤六下六召仕の家の新荷す。かゝり尾藤
六家の射術の暮月第六天の魔王も六布杉の天狗
物の數も思ひの世の。六半の羽織と着る六石
給賜の同心も六つ。村々知行所六谷の儀と積込

負く六千里の道行の六浦の詠と詠い連れ園東
小六の伊達風と六信振と上行し。嶋も有る歌
と詠和詠の六傳と六部物や六家集六百首
歌合今六帖六帖詠草と尾加田六五術相談
本産伊六。買取し詩を作る六如乃風狂歌と云
六樹園俳諧の六三庵や許六の集。心と云
吟の歌仙の表六寸の其中の右行や選と婦と云。藤
秦張義の六國の王と詠。其如く随分秘書と云
し。万六海の北は傷れ病氣も出。其節軒輊
黃帝六巨。回答。の。内。經。傷。寒。論。の。六。經。傳。何
傷寒六書。國。書。六。要。醒。醫。六。書。と。考。究。六。部。の

身麻六絶丸服六甲六氣六運氣と誦六元正氣論
六微旨大論暗詞と六腑と平去經小隨の病の六不治國
慎華の六障は揚葉餌の六言類六指を一切を
六物附子湯六味の解毒六君を湯六味丸を六
たる醫者嚴六枚有の六天の六百文を祝儀と送葉
すま一匙と六分毫すまのしよのいけ六の字も有まふ
大果六十六別南海道六箇國の浦を幾ら廻
六十六郭をたふ先名もあつ六五川大船四
の渡橋加路と六甲山伊勢乃四の六軒を産京都の
例も石川必山六を居すの看留跡有武蔵の四の六
河六蓋下や六本木佐野のこつりの雪の草六の花

芭の年の姥捨の月六夜木曾の石物産の柳求
のれと若札の六目と他類と百六谷の米相垣が
六有餘も續たるいも六十年のいぬの會と思ひ
出さる天子の駕と六六郭の側六流公卿の六侍
府六佐の藏人其跡も供附も折助の譯名則
孟六なる妹脊山の海留居此六を鑑所あれが
彦彦山の劇場も六助と六樵夫の惣軍記の強地有
阿波の鳴川武地六の助六惣角の直史やあれ
六三弟の阿園とあれ情入るも私を命う人娘人
京の六條の珠敷屋所と梅川役の助六の於箱又其
昔鹿丸小六が土堤のお六の大當りと今年六十一

本卦清りの祖又さんかむ川中聴飽りとも六
のまの六の目の院本と見れば種鳥の六役者の
惣類甚方ありおも其後々々あり淨瑠璃
次第と詠う物と元祖の六字南無を其外
猛將工男と云ふ千葉の六堂信田の六花と木更
殿の楮方席三新田の腹の心物と云ふ左の義経と
よの道井六席伊勢の義盛と云ふ鞠の六席豊之屋
姫の功居の蜂海曾りゆの加藤孫六織田と云ふ
柴田権守と云ふ三浦大ゆの百六つと云ふ其孫の六
兵衛と云ふ音柳砲と云ふ揚子の其の六平記
の忘への惣六伊勢の過越と云ふ子あはれ浪越の

茶室よ葉六あり佐川田喜六の往古の能書
徒酒宗六二場喜加六の執をも當世の若葉
あつて浅き可六の朝まらぬの内務屋と喜加六ハ
金持と云ふ二燈の咒懸屋六席右笛の上の藤田
六席兵衛御萬歳と云ふ六の義利と云ふ
蔵六も鏡山も八就馬の善の歌祭の文の番頭
善六儒家六三浦の帯と云ふ兵衛の範
柗生本林六琴曲の裡總と云ふ八の表揮と云ふ
六殿有六殿柳と云ふ六殿の意意と云ふ鳥類と云ふ
六の格あり取と云ふ十六の善と云ふ皇一丁
六文と云ふ八體一益六文と云ふ月と云ふ二十の夜侍

如き事七つあり、カラリツ然然と云ふか、佛門に入ると七天性七聖賢
七不可避七支葉七聖跡と云う七真如の月と云う過去の七佛
華嚴の七佛と七衆の比在優婆塞と取巻の法會の七僧オコシ敬小
内具の七情七教七神七慢と云う大乗妙眞の素の七軸と云う
聞は其七字の題目一向流の七字引七高祖の和讃と云う
よやひ共我大徳の神道三如く社稷の七社和歌と云う
たれは神事カガの七言と云う、オホ空あり其歌七病七惑の
難の七文字の白讀あり、オホ威儀の七事の勅旨を云う、
わん世七皆面オホ白くは爰に在り大星の七段目の揚屋場を云
做い、假流遊と唱へ、新土原の中の街七軒の揚屋の
指子の七段目を云う上をたれは太極持者と云う七子の羽織七襷の

紋所七寶の紋の小袖を着、某の北野屋の七兵衛と名乗、隣
座敷の客の、奥の苗屋の半七が雁金文七も同伸文七の
一由と云う差合客もあつた、先橋上より外回の方を詠は
因縁もた、侍の二人の連と詠ひ、傍若無人過行と云う
貞列志智團七まの力の一件、刀屋の迷惑、團七九席
兵衛の挨拶と云う伴い、オホあまの七酒と云う、オホ元酒
と云う、オホ揚屋の、オホ和島の濃文と云う、オホ深七と云う、オホ先之、オホ一獻
まよ、オホせまの、オホ丹莖妓と七組、オホ近其逢方、オホ七十五
七音、オホ七小早、オホ七人、オホ七曾我と云う、オホか、オホ七合
七十五日の初物、オホ竹林七遊の樂、オホ是の過、オホせ
貴え、オホ斯と云う、オホ七回数あり、オホ七の鐘の、オホゆ、オホ七宝

充滿の寶と降 七喜喜目の借金もの残る物の契情の
七枚起請をさすや七八方々の中きや冷汗海と云の六
南柯の夢くき覺るの後百の是七十計の本葉願思綴り
是れは毎夏是七分通すもや 七の成子に至るの事
云いもあまたなる七月の御散り秋葉山へ七日の着る
七十五勝を供たれ七日七夜満す晚七項の事と云は所
七浦鯨つる七郷解々の御夢想有是や詠訪の
七石屋儀と大己貴の七名を初念し小く七と授すぬ
春の始の松飾七五三の故實あれ七福扇生七難雨威
七福神や七睡子七種の菓や七種粥七百日の過ぬれ
花是の坐す七五斎所月の中七日七間所の辭慶文ハ

七夜綴の究き着神七間草摺いぬ 七道具七度
焼續つ大綱七十五端七十二候の其中も七日の後序
よ七九は灸と七火と七道と忌七味津は事七日よ及七務疾
や七七度剪を用ゆふと七死爪の患か尚草會乃
七隻の物の七百日の彭祖浦嶋仙境半手郷里七世の
例も七録の柄柄七世も勝り七論の長七八醫書
の七方七部の書歌書より名あり七部の新芭蕉の病の
七部集七人立五七帖要文七子回布も是れは禪宗
七家の傳書も七曆下七家の記録も詳し著しきんり
かき目出度七九の灸七色菓子も七齋も七子供
七火の着るべし七月七日七夕々々七宗帝省項天の伝

七を母にあやふれやも女は七まの患ありて七人のまをう
まは七両分を方志を疑ひあへるる又と賜りてハ
七日この吊ひもかきも仰ぐ七生も恨み盡し
あられし源氏七代の其中にも東奥七騎ハ頼義
義家景通光任も杉山七騎ハ鎌倉殿
土那周崎の人々能登殿ら勢七人張舟ぐり
りて七艘飛腹まきまされ七千人の力を得り
兄弟も小服めかへて海へ入る武蔵七堂先陣
も結城の七席朝光ハ鎌倉も大身那直の
兵弁も末裔今七家も連綿して七唱は傍北東
瀧口競ハ南條ハ馬の手柄七女もやそこの功績

かきし時代は道々隔まき小豆坂の七本鎗又扱別の
七本鎗植田解は七本鎗中も其名高きハ
志津を蔵の初々瀬七本鎗も其名高きハ
七隊長同トも七法印坂西七雄江原七隊
貞列山東七家者の自島津七層尾子も七馬士伊勢
七騎の王様も甲列七席の軍令も武の七徳の借りて
七書七條も博覧し軍の七政整りて豪傑
やあまきあふれやも美卒の世も將川の陰武も七騎と
備りて倭藤も智略もその其秀郷の高名も興
い山と七巻も平白都達も七高山も美濃七宗の
山並も百年の留の如く七頭も川も震動も

傳三曰、秀乃卿七、電の枝と小指、今世雷原に七、電と種、事此故れ七、電、これ其、四の

七、金山青溪の七、橋、小獅子奮迅の勢、斯やと思ひ、たす其、蟻、蛇の、子、八、七年七月、腹内、宿、河、七、是、催、く、出

生、く、七、夜、七、子、里、と、趨、く、七、十、音、の、あ、ら、は、い、七、年、く、を、

糸、と、食、の、七、歳、未、満、の、内、も、く、七、丈、餘、く、成、長、く、く、

七、ツ、何、事、か、ん、ん、七、歳、の、音、も、く、依、く、く、京、の、七、瀬、や

七、口、も、日、夜、朝、暮、も、那、個、七、瀬、音、也、七、薬、師、日、上、の、

七、社、中、下、上、鶴、下、鴨、七、社、の、神、奈、良、の、都、七、天、守、七、屋、御、尊、の、

道、場、を、残、る、隈、か、順、拜、お、伊、勢、七、度、執、田、の、七、社、社、の、其、一、

草、薙、の、宝、剣、七、ツ、の、剣、と、添、八、剣、宮、も、項、の、天、保、己、亥、の、壬、申、春、中、の、

七、日、の、翌、夜、七、ツ、時、過、く、類、鳴、鳴、を、盗、人、入、た、く、を、宿、直、の、神、人、

七、里、お、く、れ、七、早、本、も、過、す、く、宿、直、の、文、七、も、見、か、ら、く、く、

往、昔、の、異、圖、の、僧、七、作、の、加、不、由、を、の、く、宝、剣、と、覆、の、筑、也、也、も、く、

七、道、の、い、あ、へ、く、び、く、く、住、置、の、場、所、七、本、内、原、の、七、本、の、脚、も、く、く、

七、才、餘、度、の、祭、禮、の、關、七、寺、の、花、紅、葉、も、眺、め、七、尾、の、天、神、も、く、く、

吾、婦、の、方、の、舞、臺、の、七、郎、今、く、七、瀬、七、面、山、の、七、里、姫、の、舊、邸、も、隆、興、

山、東、七、郡、の、經、簡、亦、齋、七、度、七、首、の、出、湯、の、信、別、七、由、七、千、の、項、

七、の、情、も、痛、く、終、は、七、の、肝、栗、も、所、大、和、七、瀬、の、里、七、本、松、の、長、者、が、

許、奉、答、も、傳、へ、く、六、異、端、の、説、の、七、の、娘、子、を、産、く、例、も、く、

あ、事、の、形、免、事、の、継、ぐ、く、か、く、尊、は、七、畫、の、伯、長、柙、下、惠、七、賢、

王、義、之、七、子、も、及、く、く、神、子、明、の、七、才、子、等、知、所、非、也、

齊、の、七、王、戰、の、七、雄、南、帝、の、七、帝、の、愛、給、の、我、國、の、天、神、七、代、往、昔、を、

七、才、茂、後、百、河、の、御、宇、も、あ、く、國、を、利、享、奉、の、七、勢、仙、加、尊、成、の、七、年、の、

長、朝、の、言、葉、を、識、く、共、筆、も、及、く、く、七、清、華、の、公、達、も、七、辨、の、殿、

大も普く弄りぬる者下の今世奉んは七之節の和葉氏
 師の事たる夫姓早良發百中の筋骨無く七癖の病の如
 弓幹の七期より備へし覺たす七里便も近き又初去學
 七里の渡り後を慮し勾欄も今日も大和屋の七旬延り身を持
 七七四十七の阿七の役や七夜の色の七文字七變九七幕續
 聞る七起り行ふ七事茶七斗の相場も今七食の小言
 比れの高ひ七女の相鏡も御觸り七分の七言七語七
 下り前力の七員七項長七草七夕八買の相場
 次の各作も讀む七無

去りし頃名府八人乃七児身以
 撰りし集りて一冊乃七好むを好
 乞児身傳を題す文ハ今堂の毘寺
 圖ハ連城亭玉見の川序文ハ

西國順禮 我年出右の延發俗ニ順益字修前
古今堂の毘寺
 断峯山人 我高橋右ハ廣道俗橋屋跡太前ト云
我言亭仙果ト之替田驛傳
 檀那山人 我少寺ハ右廣路俗九右門柳枯
連城亭玉見
 字無三症 權別可兒部願真寺和尙也
後尊壽院ノ院主
 銅羅和尙 我加藤右ハ俗常徳
古仙又
 段文ハ

八坊之主 古今堂龜壽ノ替名

八八園似多理 五文鏡藏道人連城言ノ替名ナリ

八太席 笠三子仙果ノ替名ナリ

擊之良大八 連城言ノ玉兎替名ナリ

八九笑 醉讀空謬道替名

八五八席 或及名唐道俗兵在門別号同好園又玉聖堂未學ノ替名ナリ

等由川此文章集八之字盡十申ル
爰子寫一之由セムコトナリ

乞兒奇傳段

客あり問て曰し書ありて終て人若るの
乞兒豈それ是と云んや予答曰是ハハハ
其大數と云ふものハの數ハ上古の伏羲
八卦と書し〜〜〜萬物皆八と書し命書
天ハ八風八星也ハ別大ハ別並江八景石文
八葉伊豆ハ文讀と云ハ八萬山城ハ八瀬
八坂伊勢の國ハ八十瀬川神ハ八幡八王子
八所ノ御靈ハ八釵宮ハ百萬神ハ十名祭神也
八岐の大蛇也ハ神鏡也ハ八咫の御鏡佛也
八宗法華經ハ轉ハ功德水ハ相次送八日ハ

御釋迦の誕生も是又華師の縁も 儒家の八刑
 八條目人の八元八凱を周の八士を始し 彼龍申
 の八使牛若孫も八天狗嵐八剣八年長松尾より石
 高麗八元司 迦来流行皇見の八大海底より八
 八天龍王冥府に在る八大地獄樂の八音八拍子八
 秘奇の八則八代集曆の八專八將軍八篇八十夜者
 軍家の八陣數家の八算食の八珍家もの八棟穀
 八穀其外は宮の八省夷の八蠻才の八本草の八草
 籟の八目の新あはれ八又八房有りの志賀寺の八太
 眉の八字の箱をみれば又音鳥の媚妓は是の八字の
 文とふもそでみれば葉の例の八十八の朱字を彭祖の

八百棒の八代猶其上の八百萬代又一八の喬麦の貴
 鬼の八晩茶も出瑞二十八宿星の号 三十八の長衣の
 甲八の強泥の誓願八苦の衆生を救ひのあはれみは
 八の字も毎月八月よりあきる八の身もあはれみは
 事と聞くと眉の八の教もや高言八百とついで
 其の客達方と云ふは八の眼と云ふは八の
 と云ふ

八坊、主誌



八之字盡之疑 又前後 亦八天有遠
咸心能餘ノし見 志遠合天見連半 八計
八之字伴間依天 北半丁尔 御免遠
乞 御邪魔申

天保上甲午初夏

凡八圍似多理

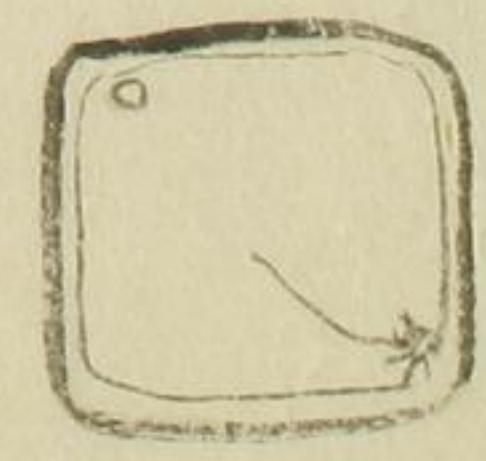
乞見奇傳致

八坊主と化現しつゝ八集山の上へ西八條の欄圍の
元人の口は海より八條(文勢語路)の自在なる八十程あり
そ是れ八箇千の衆生とて佛の統 經もやまびらけも
八言申す所のつれも 礎之 猶も強つゝあるまじき事なれり
しるも 勢あるし先二神のあはる寫り八尋秘とらんまじり
しる八の子のしるも 吉岡の各八神秘伊勢の月宮
八中社神事とるが 八の中の前より 八脚礼八条
秘祈の八種あり 八條の奏や八千子の神八士神也
のち 世々神八上座八八八夜折の神八八八白玉
八八八の流のあはる八八八白玉の八八八八八八八八八八

と保上甲乙の年を豫へハツ月未
きめり午のきりハツと云ふ事
四月二十八十六

金鑪八丁程毎所よりの月と云ふ
の衆人への方ハ好しぬ

駭るる良大ハ好



乞見尋得殿

千定八坊至八身大ハの三人各ハ書の跋文撰り
而後者其餘の跋文を撰り其甚切也予も又願ふ
撰著りし三指の筆を兼り世も有八員と申す
其周の輪乃如きありて撰著りしもの月あり
於是此八枚前よりハ遍社撰りし一巻
先借ハの未由と惟りて天古宗のハ教もハ萬の法派
ハ八坊と云ふ事ありてハ八日と遷化されし親書も今和
の教主八耳白子とハ釣都の題宗帝の殿ハ八百諸僧の
勾欄の許者ハ又今もハ兼蓮花堂の住持ハ八角堂の
伴僧の如くハ書と撰りし例とおふく必りてハ必り

龍女の八雲地獄と遊あはせ僕今此歌を音下
其のくちぎは恰八ッ房の唐帝の如く更に内片く瓦の形
八乃邊の元古真まの辰の如く八の子と云ふも如く必真の
元を八の子形して厭ひあはれ天文家六線表八條
側目川地より八雲の妙遊を布も曆家八言あはれ
數家八個の除聲の圓積字八を用ひ八十年も
昔のち其の朝杖と許さる八白の野郎ハカ論八枚
張の風あもく走くあもく其是八文の足代もく小兒
ぞの知き川紙の揃八文の澤澤音と八國の風流男
徒原源吉早幸の八野々体も西邊られ最よ八ノ謀
八朔の早鳴あはれ松よ八葉の種も八子代と云ふ

吳竹の代の室の金書兩の則南條八行も其の一片の
錢の雲將八百廿八文也銀八兩と一流の後借書もく
昔朝もく奴存も八寸釘もくあもく八三を丸腸もく
く可もく其流形八笑人其人もく眼八年八出月八
茶番のぬいもく歌衆の道真もく八百八品其狂言も
娘皇清八鳥見續も八陣守義本城娘八入もく代の
文八のあもく危と馬合もく是八本もく是も八本
あはれ中もく定故捨ぬの背も八本背折も後未世天
も八天もく難天もく八寸もくあもくあもく君衆もく及ぬ
事も八怒もくあもくぬ指もく八文の古年也
余白乃紙と書もく味もく

九切之其西門枇杷鳩橋大橋小橋之各九十九者之長
鎌倉縣代より九角盛長と云武士者長九十九の加賀の臣御
旗本のもの九十九百九十九を云々大右と申すは
九十九の春の御錦取或九十九の具の槍の世持也東之朔
九十九の如く月を九十九の如く吹の羅漢の九十九大人
五鬼若の十の如く二子と云々云々羅漢也
西暦一二年

十

大學の十丁目曾子曰所視十目十手所指其嚴乎
十善と化はくく十悪を云々者の大守の如くありぬ
十禱年の和の十念と請ふ共十鬼能化の菩薩の句論
十萬億之十王達十の如く盤中由るは云々又天皇代
上宗神天皇の御代も御代も又十割抄も宗法の手也
之の如く十の數の尊の如く又の王の十膳神の如く
十握の寶劔神代の玉大舟の十布衣孔の十哲
書十體東垣の十書二唐の末十國記乱は十人
十四羅殺舞會の十將年十國の大王毛利弘元

名所の山は十市山浦は十座浦橋は十組の橋官は十祥
師官は山の下は十刹と三寺は有相家十元十津川真の
旗色羅法師十玉頭の脇扇は十手指は曾我の十節
十番切木は十代の松十姉妹鷹来紅黄白と十梅錦
百舎の石は十大折 菅原十雨は勢ひ十才徳の世はのり
武蔵の國は十里四方の其は十萬坪の端は十萬
石以下以上の諸大石十重世重慶と子建は十有
十夜をりあひひく十徳と着十河廻は十面化十三字形は
刀と指は十把あはりの侍は田中十内々小野寺十内々十
遍舎が藤栗毛の彼十の字きんは若朝はぬし兩人
よは向あひ東海邊は十三たよ十塔の宿は十平塚大坂の

川の十間坂は宗洋の山の十園子酒は十旬饅頭は十字の
とあひは芋頭は十貫免取寄 盛親僧都正月十日初表
毎月十日は金尾雁標弥寺の末の百八十輪院御影は水
無月二十日は十念寺の虫掃の笛の十節十雨は考あはく
狂言の十高以上十本 勾欄は其役割は股屋十本橋
小大谷十早は旅妻清十市は市川十阿波の十席共衛本
右銀十市は市川殿十市は島田十三市は園三市は殿サ十
よ市川園十忠臣蔵十段目の前の段十七瀬は石はまは
ら九十方は暮十八種十三種小浪の顔は赤証十人並も贖丸
娘年暮は十斗は十とて突手鞠寄物の好は香は十徳有
其十種香好は古銭好十字の半兩金十兩は買買香

寶永の十文銀の十文もかゞ一層の十文暮十死ハ皆思旨也
 百の十とて説文の元し事柄手と柄と違へてまじりて
 十とびりて伊勢物成るといふ其外十経十巻程の真り
 十遍抄抄一郭と此一五千其月數十の巻と集の書と
 此のころ一十箇とて和文のなれば苦累十年とて
 十月もやがて春の十之字盡と筆とてや海天保十
 年十十つものこのころ一抄を原岩と十能すこの火鉢
 入十寸鏡とて白髪とて本物社板かゝり分ち初とて
 十と一りぬぬ右衛門尉源廣路武蔵

一 工序又但令但令老人ハ御書院香石并九家書の
 握敷（名所多分所）右孝政狂勢ヲ詠て別号ヲ
 同導堂乗穂ト云

一 第一回ハ中西氏 帳簿得書了目 右 俗龍雄
 小云西師ナリ 別号ヲ長衣館又坦丹 （能名ナリ）

一 第二回ハ段西師年出氏 彌屋橋日下 右延齡
 俗順益 別号古衣堂ノ鬼寿字子修甫
 補二序ハ 原氏 （大進寺直信ノ臣ニテ） 右篤親
 又清彦共 俗長右衛門 後徳信 右ニテ 刺髪也
 又清彦共 俗長右衛門 後徳信 右ニテ 刺髪也
 又清彦共 俗長右衛門 後徳信 右ニテ 刺髪也

一 第三回ハ天狗身合書天狗八人ト云ハハ行詔

○蒼龍園 松井氏 東向 龍崎大御所横三藏西北角

右武直佐衛兵衛可悟 天保十二年八月十一日

○龍風園 多品 龍延屋大入門之今 永坂氏 伏見

○龍眼木園 千瑯 初常樹下 氏小川家 岩松屋

右 俗新兵衛 初在常樹下今在龍眼木園 常有職 日好 書籍 ヲ集メ 又画 ヲ學テ

○夏今堂 龜壽年出氏

○無間堂 雲河 浪川 御藏 願真寺 和尚也 住持ハ御醫師柴田兼隆子 後尊壽院 代

○長春館 又堪齊寺 中西氏

○醉譜 學之四訪 雅水 頭氏 大道寺直宮子 右正信 俗三右衛門 又三右衛門

右七人 ニテ 加へテ 八天 拘連 常之 淨修 の書あり

- 一 三補遺 大倉龍園 又再三七同
- 一 第四回 倉龍園
- 一 第五回 無間堂
- 一 第六回 夏今堂

- 一 第七回 醉翁亭記
- 一 第八回 前二評久
- 一 第九回 蒼龍園
- 一 第十回 連枝亭

終

二六

